

## 浅野俊夫さんのこと

小嶋祥三

浅野俊夫さんは鳥取県米子市の出身で、わたしと同年だった。わたしが京大・霊長研の心理研究部門に就職した時に、すでに助手（昔の職階名で）として在職していた。かれが慶應義塾の心理、わたしが早稲田の心理出身で、愛知県犬山市の研究所で早慶（慶早、慶應では、早慶戦でなく、慶早戦だった）が一緒になった。独身時代のかれは夜行性で、皆が出勤する頃に帰宅していた（同じ宿舎に住んでいたが、かれの車とすれ違うことがしばしばあった）。かれは話好き、議論好き、批判精神旺盛で、いつも黙っているわたしとは正反対の性格だった。かれは鼻の下にひげを蓄え、考え事をしている時にはその先をしごいていた。かれはいろいろな商品を紹介している **Mono** という雑誌に目を通し、ゴルフの練習場に通い、株に手を出しているようだった。かれはまた、自動車などのメカに強い興味を持っていた。これらはわたしには縁遠い世界だった。かれは現実の世界に対応していたが、それはわたしには存在感の薄いものだった。

浅野さんの心理学に関する知識を聞いていると、かれが慶應でしっかりと教育されていたことが容易に推測できた。この点は、わたしが後年霊長研から慶應義塾に移った時に、十分すぎるほど、確認した。一方、早稲田で学生は自由に自分の興味を追求できたが、言い方を変えれば、放ったらかしだった。ただ、早稲田のために弁護すると、慶應は学生数が少なく、基礎心理学に特化していたが、当時の早稲田は基礎から臨床、社会まで幅広く、慶應ほどの密度で基礎的な心理学の教育ができなかったと考えられる。

浅野さんは文学部心理の出身だったが、情報科学、コンピュータ、論理素子による回路に詳しく、かれを先生にして、心理、神経生理研究部門の若手教員、大学院生が神経生理にあった米国 DEC 社のミニコン PDP-12 のアッセンブラを修得した。かなりの人数が参加したので、コンピュータの割り当て時間が午前 3 時になることもあり、結構大変だった。その後心理部門に PDP-8 が導入されたが、それまでは AND, OR や FLIP-FLOP などの素子で、課題制御の回路を組んでいた。早稲田では実験装置の時間制御に苦労していたので、そういった問題が容易に解決することにわたしは内心狂喜していた。実験制御はパーソナル・コンピュータに移行していったが、わたしは技術的問題で実験が制約されることを嫌う傾向があった。南雲純治さんという優秀な技官がいたので、かれに頼めばいろいろと助けてくれたろうが、わたしはできるだけ自分でやるようにしていた。無論、すべてを身につけることはできないので、他部門や他の研究機関との共同研究で足りない点を補った。わたしが米国 NIH に行ったとき、浅野さんから学んだコンピュータの知識や技術が大いに役立ったことは、『留学記』で述べたので、繰り返さない。浅野さんはわたしが出会った心理学者の中でも特異な存在だった。かれに感謝しているし、かれに出会えたのは幸運なことだったと思っている。

浅野さんは慶應で佐藤方哉先生の指導を受けていたようだ。師弟の密接な関係が話の

端々にでてきた。わたしは「先生」のようなエライ存在は苦手で、あまり近づかない方だったので、浅野さんの話を興味深く聞いた。佐藤先生はスキナー派の行動理論、実験的行動分析学が専門だった。浅野さんも霊長研で行動分析学の重要性をおおいに説いた。スキナーがハトで行った強化スケジュールの実験をサルで行っていた。わたしも行動分析の知識を身につけていき、実験でその技術を利用した。ただ、浅野さんには申し訳ないが、脳への興味が強く、行動分析にすっかり染まることはなかった（浅野さんは皮膚電気反応 GSR や脳波など生理心理学にも強かったのだが）。スキナーは環境面を重視し、行動の研究者が脳に興味を持つことは逃避だと考えていた。わたしはある一つの立場に立ち、それを深めるよりも、脳研究を含めいろいろな領域と接点を求める方が好きだったのだ（その点については『若い研究者へ』の中で述べておいた）。慶應の渡辺茂さんが定年退職時の講演で、行動分析は心のふるさと、という表現をした。わたしもそれに似た感情を持っている。ただ、わたしは行動分析の応用面、応用行動分析を評価しており、大きな科研費の領域設定をした時に、山本淳一さんなど応用行動分析の研究者に参加してもらった。

浅野さんは心理研究部門の助教授になり、わたしは米国 NIH へ留学後、神経生理部門に移った。浅野さんは久保田、室伏両先生が導入したチンパンジーの言語プロジェクトで中心的な役割を担った。浅野さんなしにはその後の霊長研のチンパンジー研究はなかっただろう。しかし、浅野さんは突然愛知大学へ転出してしまった。浅野さんは Skinner の *Verbal Behavior* を名著と評価していたのに、わたしは浅野さんのこの決断をよく理解できないでいる。霊長研の研究環境は日本一だったかもしれないのに。また、霊長研は共同利用研究所だったので、行動分析学を広めるのによい環境だと思うのだが。その後、浅野さんとは年賀状のやり取りをする程度の関係になってしまった。すっかり染まったわけではなかったが、浅野さんが残した行動分析学が霊長研心理の一つの要素として、しばらくは残っていた。